

---

# メヴィウスの環

四方祐樹

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

メヴィウスの環

### 【Nコード】

N6239C

### 【作者名】

四方祐樹

### 【あらすじ】

かつていじめられていた有栖は、高校入学を期に自分を変えようとした。そんな中で出会ったクラスメイトの誠哉に心を惹かれ始めていたが……。第二回群馬県高校生文学賞選外。

手を伸ばせば、いつでも触れる。綺麗で醜い、不確かな結界。<sup>バリヤ</sup>誰も寄せ付けない。誰も入ることができない。そんな私だけの世界が、ここにだけは広がっているの。

私だけの、孤独で醜い世界。

それを壊せる人なんて、誰もいないわ。誰も私を触れない。私とみんなの間には、見えない境界線が引いてあるからね。

私に触れたい？　　けど、そのままじゃダメ。ちゃんと考えなきゃ。

あなた達が、私にしてきたことも。そして私の心の結末も全部、ね。

それができなきゃ入れないのよ。

……じゃあ、ゲームを始めましょう。私が勝つか、あなたが勝つか。

本当の答えは、ゲーム次第。

1

「いいよねえ、有栖<sup>ありす</sup>って」

転がってきたボールを抱えながら、私は首だけで振り返った。視線の先にいるのは、クラスメイトで友達の古崎<sup>こさき</sup>七惠<sup>ななえ</sup>だ。

七惠はふんわりとしたショートヘアを揺らしながら、夢心地とばかりにそんなことを独り言ちている。私はそんな七惠の姿を見て、ふうつと嘆息した。

「何がいつて言うのよ」

「なんかさあ、全てにおいて」

ハーフパンツの砂を払い落しながら、七惠はそう言ってくる。

「有栖<sup>ありす</sup>ってば可愛いし、細いし、髪もサラサラで綺麗だしさー。加

えて小柄で、なんか守ってあげたいタイプっていうか」

体育の授業なんて、もうどこへやら。七恵はそんな雰囲気を出しながら、有栖に向かって微笑みかけた。

現にお喋りは止まらないし、目の前でやっているサッカーの試合も、見てはいるものの視線は臆だ。意識は多分、全くしていない。

「そうかな。別に普通じゃない？」

「だったらその普通を、あたしにも分けてよ。せめて有栖みたいに小柄になりたいわ」

図体でかいと、いい役回ってこないの。しょっちゅう雑用を押し付けられるし。

苦笑しながらそう言つと、七恵はそれにさ、と続けた。

「なんか有栖ってさ、名前も可愛いじゃん」

だが羨ましそうに言う七恵とは反対に、私は思い切り訝しげな表情をあらわにした。

「えー。嫌だよ、この名前」

「そう？ 『有栖』って名前、あたしはすごくいいと思うけど？」

なんか不思議の国とか行けそうで」

「それが嫌なのよ」

推してくる七恵に、私は肩を竦めて見せた。それでも七恵は「いいじゃない」と言ってくれる。けれどどうしてか、私はそのことを素直に誇ることはできなかつた。逆に感情は、憎悪さえ感じている。しかしそれを何とか押さえ込むと、私は困ったように首を傾げた。「でも七恵がいつて言ってくれると、ちょっと嬉しいな」

へへつと無理に微笑む。すると同時に、胸には形容し難いほどの微量で鋭い痛みが走り抜けていった。

ああ、私の心はそうは思っていないのね。

やっぱりと思う肯定と意気地なしと思う否定が、同時に胸の中で渦巻いていく。それは解いた卵のようにぐちゃ混ぜになって、淡くて不安定な色を、後に残してくれた。

ねえ、私はどうしたらいいのかな。

胸の前で包んだボールをきゅっと抱きしめながら、私は心の中でそう囁きかけた。いつもそう。きつと誰も答えを返してはくれないのだからうけど。

「おーい、西宮ー！」「しらのみや」

するとコートの方から、やけに元気な声が聞こえてくる。クラスメイトの一瀬誠哉だ。「いちのせ せいざい」

誠哉は額に浮かぶ汗を砂埃にまみれた腕で拭い取ると、陽光よりも明るい笑顔のまま駆け寄ってきた。

「なあ、サッカーしようぜ。そこにずっと突っ立っているの、暇だろ」

「えー、遠慮しとくよ。男子とやったって、あたしら勝てっこないし」

誠哉の言葉に嫌そうな顔を見ると、七恵は唇を尖らせてそう言った。

だがそんな私たちを見て、誠哉も「えー」と声をあげる。実に不満げな表情だ。それから「んー」と一つ唸ると、誠哉は思わず思案顔になった。

七恵が私の肩を叩いて、表情だけで「どうする？」と尋ねてくる。私は曖昧に首を傾げて見せた。

「けどよ、そこにいると内申下がるぜ。現にそこで教師が一点、また一点と減点を……」

ほーら、体育の石岡が鼻息を荒くして眼飛ばしているぞー。あれは絶対、点数を引いている目だ。……あつ、ホラまた一点引かれた。そんなことを言う誠哉に、私たちはとうとう負けを認める。

「解ったって。ね、七恵」

「だろだろ。それに西宮ってばちょうどボールを持っているしな」  
へへつと嬉しそうに笑うと誠哉は私の肩を叩き、それからコートの方へと走り去っていつてしまった。

「あいつらにも言うっておくからさ、絶対に来いよな！」

その背中がどうしてだろう。私には酷く眩しく映ったのだった。

『誰がこの名前を好こうか』

腹の中で、私はいつもそう毒づいていた。

どうして私が、こんな名前を好きになれるのよ……。

誰にも言っていない。勿論これからも言うつもりはない。そんな私の過去の中で、この名前はだけはどうにも許せなかったの。

いじめ。

今思えば、とても昔のことのように感じられる。去年 中学を卒業するまで散々いじめられていたというのに、何とも平和な頭だと思ふ。高校に入学してから、私はとんと変わったらしいわ。

……うつん、違う。変わったの。自らの意思で、そんな自分を変えたのよ。

嘗ての自分は、もう要らない。いじめられて、うじうじして。人とは距離を置くような自分を捨ててね。

それは思いの他難しいようで、簡単なことだったわ。そして自分が変われば、周りも変わる。「有栖だって。ありえないー」と言われ続けていた名前も、今や「可愛い」で通用するようになっていたってわけ。

ああ、何て人間は愚かなんだろう……。

最初に思ったのは、そんなこと。けれど次に思ったのは自分への罵倒、罵り、蔑み、怒り、嫌悪感だったわ。けれどそんな思いを感じるたびに、私は周りを責めていたの。

いいじゃない。そんなものに騙されている周りが悪いのよ。私は悪くない。勝手に偽りの私を受け入れている周りが悪いんだわ。

これはゲームなの。いつまでこんなペテン師に振り回されているのか、っていうね。

……けど最近、そんな私に異変が起こったわ。あるうことが恋をしてしまったの。クラスメイトの男子に。そしてその恋愛感情が肥大するにつれて、私の心は嘔く回数が多くなっていっていったってわけ。

私はその声がとても嫌だったわ。苦しい過去を蘇らせるからね。

だから今日も、私は必死になってその言葉を振り払うの。  
『ねえ。いつまでそうやって、その皮を被り続けるつもり?』

2

「西宮。おい、西宮あー」

つまらない数式を書き足してゆく教師の背中を見つめていると、突然叫ぶように囁く声が、チョークを黒板に叩きつける音と共に聞こえていた。

頬杖をつき半ばぼうつととしていた私は、その声にはっとして首を廻らす。

「西宮、俺!」

首を廻らした先、こっちこっちと囁き続けるのは隣の席に座る誠哉だ。私と視線が合った途端、何故か安堵にも似た表情を浮かべられ、ちよつとばかり驚く。

先生の唱える呪文のような数式の説明。どこかで別の話をする生徒の声を聞きながら、私は声を潜めて誠哉の方へ身を乗り出した。

「何?」

「いやあ。目は覚めていたんだけど、精神のほうが大バカンスに出かけていてさ」

「ようはうたた寝していたのね」

「まあ物は例えようって言うやつだ」

訝しげに私が視線をやると、誠哉は参ったとばかりに苦笑する。

「そこで一つ頼みがあるんだが」

「ノートですか?」

「残念ー。そうじゃないんだなあ」

もうちよつとで正解だったのに。と何故か一人ではしゃいでいる誠哉に、私は「じゃあ頼まれない」と軽く脅しを入れる。そんな言葉にたじろいだ誠哉は、ゴメンゴメンと連呼しながら、不意に教師の背中を指差した。

「あいつ、何言ってるの？」

しばし私は口を聞けなくなる。何言っていると言われても、書かれている数式の説明をしているとしか答えようがない。

混乱した私は誠哉の指差す方向から、再度誠哉へと視線を戻した。

「さっぱり意味が解らないんですが」

「いや、だからさあ、あの人っては何について語っているんですかねえって」

「何って、書いてある公式のことでしょう」

「そうじゃなくて、ね。その……」

段々と縮こまっていく誠哉の声に、私は疑問符に包まれる他なかつた。

何がどう違うというのだろう。静かに けれど忙しく、私は

誠哉と先生と公式にそれぞれ視線を廻らせた。

と、しばらくしてから、誠哉は実に言い難そうにその口を開く。

「ごめんなさい。精神が旅行に行っていたから、この問題を解く過程がよく解らないんです。できればその所を教えてくださいませんか」

男の子としては、こういうことを言うのが憚られたのだろう。その表情は恥ずかしそうに硬くなり、耳の方まで赤らめていく。

そんな普段は見ない誠哉の一面に、私は思わず笑ってしまった。

「なッ、笑うなって」

誠哉はそう言っつて、さらにその顔を赤くする。そんな彼を見て、私は再度吹き出した。

普段は見られないような表情が、こんなにも嬉しいだなんて。これだけ話せることが、こんなにも楽しいだなんて思わなかったから。

笑っているのは、あなたのことを馬鹿にしているからじゃないの。そんな言葉を胸の内に秘めながら、私はシャーペンを片手に誠哉

の席へ身を乗り出す。そこにあるノートは彼が寝ていたんだよと、へなへなの文字でそう語っていた。

私の心が、また嘯くの。

『仮面なんて、そのうちボロが出るわ。彼にだってすぐバレてしま  
う』

それは何て痛い言葉だろう。私は首が千切れんばかりに、思い切  
り横に振ったわ。

けれど私の心は許してくれないの。いつまでもいつまでも嘯いて  
くるの。

『そうしたらあなたも終わりね。またあの頃に戻っちゃうの。そう  
したらまた一人ぼっちになっちゃうのよ』

ね。そんなのは寂しいわよね？

私の心は、それは楽しそうに嘯いたわ。

『そうしたらあなたは、またうじうじするのね。あの頃みたいに、  
誰も寄せ付けられないようにして。……私には解るの。だってあなたは  
私だもの』

ふふふと私の心は笑う。私は耐えられなくて、両耳をぎゅっと塞  
いだわ。それでも、あの声は聞こえてくる。まるで切り離せないと  
ばかりについてくるの。

『逃げたって無駄よ。私はあなたなんだから』

過去は変えられない。

運命は変えられない。

けれど、私は変えられるでしょう？

そうじゃないと、気が滅入ってしまうもの。

暗い道を走りながら、私は必死になって口を開いた。けれどそれ  
は、私の心に真っ向から破壊されてしまう。

『変えられない。変えられないの。だってあなたはどれだけ掘り返  
しても、あなたなんだもの』

数学から開放されたのは、それから数分してのこと。その間先生の話聞きながら誠哉に数学を教えるという高等技術をこなしていたがために、普段以上の疲れが襲ってくる。

ノートと教科書を机の中にしまうと、私はうんと伸びをした。

「いやあ。マジで助かったよ」

しかし伸びも半ばに、誠哉は照れくさそうに笑いながらそう言うてきた。

「ほんと、西宮って教えるの上手いよなー。将来は教員か？」

「んな訳ないでしょ。大体なんで私が教師にならなきゃいけないのよ」

腕を下ろし眉を顰めた私を見て、誠哉はえーっと不満そうな声をあげる。

「教師はお嫌いですか？」

「人に何かを教えるのが苦手です」

「んなことないって。西宮ってば先生よりも先生らしかったぜ。おかげで二次関数の存在意義が解った」

二次関数はつまり、曲がるためにある！

そう断言する誠哉に訂正の言葉さえかけられないほど、私は脱力した。誠哉は時々、何を考えているのか解らない。

ただそんな状況であれ、心中で楽しんでる自分がいることも事実だった。何てことない。彼が次に何を言うのかが楽しみなのだ。

訳の解らない二次関数の存在意義を唱える誠哉に、私は小さく反論する。そうすると誠哉はちよつとむきになって、ああだこうだと自論を述べていく。

するとそれを見ていた誠哉の友人が、無邪気に笑いながら言葉をかけてきた。

「おいおい、どーしたんだよ関数なんて。勉強嫌いの誠哉君には似合わねえぞ」

「うっせーな。俺は西宮に関数の存在意義を教えてやっているだけだ」

そうだよな、西宮！ と真剣な表情で言ってくる誠哉に、誰も教えてもらってないのになと思いなながらも、私は「うん」と頷いた。「ほれ見ろ！ 西宮公認だぜ」

実に嬉しそうに誠哉は言う。だがそれは友人の方も一緒だった。一瞬何か考えると、途端に何かを悟ったような表情を向けてくる。

「ふーん。つまり教室でイチャイチャね」

「は？ 何言ってるんだよ、お前。別に俺たち付き合ってるなんかいねえし」

「けどよ、これから付き合うかもだろ？」

「ありえねえこと言うなよ。だって友達だぜ？ どうすりゃそんな関係になれるっつーんだ」

冗談は顔だけにしろよ。そう言う誠哉の表情は、あからさまに嫌そうに見えた。

な？ と再度誠哉に問いかけられるが、なかなか返事をする事ができない。

「……西宮？」

「そうだねっ、って。」

そう答えるだけでいいっていうのは解っていた。それだけで解決することも解っていた。

それなのになかなか口から言葉を出すことができない。誠哉が顔を覗きこんできているのに、それでも動くことさえ叶わない。

ああ、惨めだな。

仮面、もう取れちゃったな。

苦い声で肯定した後思ったのは、意外にもそんな言葉だった。

もう彼らの前で、自分の姿を曝せない。

心の底で、過去の傷がそう囁いていた。

5

『ほうら。もう剥がれちゃったじゃない』

もう一人の私は、弾んだ声でそう呟いた。

『やっぱりそうなる運命なの。あなたも私も、誰かを好きになつたりしちゃいけないの。だって最後に悲しむのは渡したちなんだから』  
そうね。解っている。そんなことは中学の時、とうに学んでいたはずだったのよ。

それなのに私は期待してしまっていたんだわ。心のどこかで誠哉と気持ちが通じ合えるんじゃないかって。根拠もないのに、そんな確信めいたことを思っていたんだわ。

図々しい。確かにそのとおりかもしれないわね。けれど誰かを好きになる人の心って、そう簡単には如何こうすることもできないじゃない。

嫌いになることは、それこそ簡単だわ。何かちよつとでも嫌なことがあれば、友情も途端に崩れ落ちてしまうもの。今まで築いてきた信頼も思い出も、何もかもを連れ去ってね。

けれど人を好きになるのは、比べ物にならないくらい複雑なのよ。ましてや私みたいに誰かを信用することができないような人間には特にね。だって、怖いじゃない。いつ裏切るとも知れない子に、自分自身を曝け出すなんて。いくら『友達』だと思っけていても、次の瞬間には『敵』になつていくかもしれないんだもの。そんな本性も解らない他人を信用するのって、本当に難しいと思うわ。

そしてそれが好きになることは、もつと大変なことだと思つたの。だってそうでしょ？ 人を好きになるっていうことはつまり、その人に自分の人生をほんの少し託すも同然のことだもの。

だからね、そうやって好きになつた人を、それこそ理由もなしに嫌うだなんて、きつと難しいことじゃないのかって思うわ。一度はそこまでの決心をつけた気持ちだもの。

『でもあなたはそれがあつて、今傷付いているんじゃない。あなたが折れちゃえば、元も子もないのよ』

そうだけど……ッ！

『あなたは中学の時に、散々酷い目に遭ってきたじゃない。それと

もまた、同じ目に遭いたいつもりなの？』

違う。違うの！ ただ私はッ。

『だったら思い出させてあげる。もう二度とこんな辛い思いをしな  
いようにね』

嫌だ。やめて。お願い

「いやああああ あー！」

荒い呼吸、跳ね回る鼓動。金切り声が朝の蒼闇の中、悲鳴となっ  
て響き渡っていく。

ああ、夢だったんだ。

握りしめた布団の感触で、私はそう悟った。

昨日のことが、中学の頃の記憶が、脳裏を過ぎっては私を苛んで  
いく。

どうして私は誠哉の当たり前の言葉に傷付いてしまったのだろう。  
どうして中学ではあれだけ、酷いいじめをされてきたのだろう。

もう、何も解らないよ……。

じっとりとした嫌な汗が背筋を伝い、濡れたパジャマに吸い込ま  
れていく。

私は暴れる胸をぎゅっと押さえると、涙を流しながら思わずその  
場に蹲った。

頭の中では嫌な思い出しが、流れることはないのに。

6

「どうしたよ、有栖。顔色悪いぞ？」

おはようと教室に入ってすぐ、その体調の悪さを七恵は指摘した。  
心配してくれる七恵に何でもないと言うが、根本の原因はとうに知  
れていた。優れないのは体調じゃない。心だ。精神が今、滅入って  
いるのだ。

でもそれを七恵に言おうとは、やっぱり思わなかった。だって原

因を言えば必然的に、いじめのことを話さなくてはいけなくなる。

今までがそうだったから、私には解っていた。いじめられているような人とは人間、かわりを絶ちたく思っているのだ。良く言えば自分を守るために。悪く言えば問題児とかわりたくないがために。

時たまそれでも友達でいてくれる人もいるが、勿論七恵がどちらの人間かは定かでない。だったら自ら危険に足を踏み入れないようにする他はないだろう。それが多分、今の私にとって最良の道だろうから。

「ほんと大丈夫だよ。実は私ってば、昨日夜更かししちゃってさ。

眠いだけってどうか」

「ほーう。……さては恋か？」

「そんなんじゃないって。マンガを読み耽っていただけ」

「へえ、そうなの」

恋じゃないのかと実に残念そうに呟く七恵に、私は苦笑の色を浮かべた。その半分は演技。そしてもう半分は、もう少してバレるところだったという警戒心。

「でも寝不足は美肌の大敵！ 有栖は可愛いんだから、もーっと美に力を入れなきゃ」

そうと決まったら、さっそく今日から十時に就寝ね。とはりきっている七恵に、私はまだやるとは言っていないよと笑いながら言い返した。

すると開けっ放しの教室の扉から、誰かが入ってくる。 誠哉

だ。私はそのことを意識した途端、その表情を強張らせた。どうしてか、誠哉が怖かったのだ。

「おっす」

片手を挙げ、誠哉はそう声をかけてくる。けれどそれにさえ返事もできずに、私はきゅっと縮こまった。

結局その日は授業が終わっても、私は誠哉と話すことができなかった。

「なあ、西宮。どうしたんだよ」

ことが動いたのは、清掃時でのことだった。

中庭の落ち葉掃きをしている最中、近くにいた誠哉がこちらへと歩み寄ってきたのだ。

私はすかさず誠哉との距離を取ろうと試みるが、足を踏み出す前に肩を誠哉に掴まれてしまう。突然のことに私が小さく悲鳴をあげると、誠哉は悪いとその手を放した。

「あおさ、その……昨日は悪かったな」

するとどういいうわけか、歯切れの悪い声で、誠哉はそう謝ってくる。あまりにことが唐突すぎて、私は今日初めて誠哉の顔をきちんと見た。彼は明らかな困惑の色を浮かべている。

それから誠哉は頭の後ろを二、三掻くと、竹箒の柄に絡ませた指に力をこめていった。

「俺、バカだからさ。どうして西宮が落ち込んでんのか全然解らない。けど……多分昨日、何か言っちゃったんだろうなって思って」

誠哉の声が、風に乗って聞こえてくる。

そう、だね。でも……誠哉は悪くなんてないんだ。悪いのは全部、この私。

言いたくて　でも言ってしまったら、もう取り付く島さえないように思えて。私は未練がましく口を引き結んだ。誠哉の顔から、また視線を背ける。弱い私には逃げるだけの、そんな手段しか思い浮かばなかった。

惨めだね。馬鹿らしいね。

解っていても、それでも私には何もすることができなかった。そういえばいつからだろう。こんなにも自分から行動を起こすのが怖くなってしまったのは……

「それでも俺、できれば西宮のことを知りたいんだ。お節介って思つかもしれないけど、これでもすげえ心配だからさ」  
だって俺たち、友達だろう。

そう言つて、困つたように微笑んでくれる誠哉。けれど私はその言葉にさえ苦しいほどの痛みを覚えていた。他でもない。好きだと思つている誠哉に『友達だ』と釘を打たれていることが、何よりも辛かつたのだ。

昨日も、そして今日も。二度も釘を打たれて、それなのに私はこんなにも誠哉のことが好きで好きでたまらない。昨夜の葛藤。もう一人の私が言いたかつたのは、こんなにも悲しい事実だつたのだからか。

夏の湿つた風が、私たちの間を駆け抜けていく。髪を揺らし空気を揺らして、それはすぐにどこか彼方へと消えて行つてしまつた。

嫌な沈黙が私たちを呑み込んでいく。なす術がなくなつた丁度その頃になつて、私はようやくさつき言葉に頷くことができた。

だがそんなことでさえも誠哉は嬉しそうな笑みを浮かべると、私の頭をグシヤツと乱暴に撫でてくるのではないか。へへつと笑つと、誠哉は私の顔を覗き込んできた。

「やっぱお前、そんな顔より笑顔の方が似合うよ。笑顔の方が百倍可愛い」

「ちょ……ッ、誠哉」

「な、笑おうぜ。悲しいことなんか忘れてさ。……つて、俺が根源植えちやつたんだっけ」

『やつてしまつた』

そんな言葉がしっくりくるほど顔を顰めながら、誠哉は私から手を放し、自らの後頭部をガシガシと掻き回している。しかしそれもすぐに立ち直ると、誠哉は失敗を恐れちゃいかんぜよと尤もらしく呟いた。

「悪かつたな。なんか謝りにきたはずなのに、訳解んないことばっか言つちまつて。やっぱり俺、馬鹿なのかもしれないな」

誰かの声が、ずっと遠くから聞こえてくる。

射貫かんばかりの陽光が、私たちを照らし続けている。

そんな中で誠哉はそう言つてから、竹箒を担ぎ直して「じゃっ」

と背を向けていつてしまった。

徐々に遠くなつていく、彼の姿。すると私は自然、小さく口を開いていた。臆病者で小心者の私が、「誠哉」と声をかけていた。

途端、彼の歩みがぴたと止まる。そして竹箒を担いだまま、私の方へと振り返っていた。

「何？」

「あのさ」

葛藤が続く。私と『私』の葛藤。

怖い？

傷付きたくない？

それとも、結果を知るのが怖い？

どれもそうだ。どれも私の心の中に渦巻いている本音。否定なんてそんなもの、できるはずがなかった。

また呼びかけておいて今さらなのだが、指先が震えてしようがない。唇が戦慄いて嫌になる。それでも握り拳を身体の横にきゅつと作ると、私は一つ唇をなめた。

『ありえねえこと言うなよ。だって友達だぜ？どうすりゃそんな関係になれるっつーんだ』

昨日言っていた誠哉の言葉を、その胸に焼き付けながら。

「あのさ、誠哉にはありえなくても私……」

誠哉のこと好きなの。

意を決したのに、最後の言葉は小さすぎて風にかき消されていつてしまう。そのくせ静々とした一瞬は、やけに長い間留まっていた。

また眼前では虚を突かれたとばかりに、呆然と立ち尽くす誠哉の姿があった。私は思わずその場から立ち去りたくなってしまった。ただ立ち去らなかつたのは、遠くに華やいだ何かが見えたからだ。

「今日、天気良いよな」

目を凝らす。すると少し遠く。今まで見たこともないような笑顔で、誠哉は空を仰いでいた。キラキラと輝いているのは、きっと太陽の光のせいじゃないのだろう。

竹箒が、すうつとこちらに動く。

「天気も良いことだし、放課後にでも、どっか遊びに行くか」  
そんな誠哉の声が、中庭の中で何よりも大きく聞こえてきた。

私はきつと、メヴィウスの環なんだろう。

深い傷を持っている私と、今を生きる私。

どちらしかこうに外に出ることはできなくて、それでも二人は裏も表もなくって。

ね、つながっている。私たちはきつと、どんなものでも証明できない、そんな複雑なものでつながっている。

だからこうやって葛藤して、それで私の人生を紡いでいくんだ。

7

ゲームは誰が勝つのかしら。それはまだ、誰にも解らないわ。

誠哉は私の結界に触れるのかしら。

そしてそれを解き放つことが、果たしてできるのかしら……。

途方もないほど先の見えない結論。でも、それも当たり前のことよ。

だってまだまだ、誠哉とのゲームは始まったばかりだもの。最初の『友達になる（第一ステージ）』という過程をクリアしただけに過ぎないの。

さあ、これからもゲームは続くのよ。

誠哉が本当の私を受け入れてくれるか　もしくは『受け入れてもらえない（ゲームオーバーになる）』まではずつと、ね。

私は今、そのステージへと足を踏み入れる。

『恋人になる（第二ステージ）』をクリアするには、もうちょっとだけ時間がかかりそうだね。

メヴィウスの環

終わり。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6239c/>

---

メヴィウスの環

2008年11月7日08時33分発行